

当たり前を疑う

佐藤美桜里

文学部で学ぶにあたり、いったい何を考えるべきなのか。卒業論文のテーマはどうやって見つけたらよいのか。高校までの勉強では、「これはこうである。」というのを覚えるだけ、前後関係を理解するだけに留まり、いったいなぜそれはそのように在るのかを考える方法は学んでこなかった。私はこの一年半ほどの学生生活で、人文科学を究める文学部では、常識や当たり前の本質に疑問を持つとする視点を得るところから始まると考えている。

では、その当たり前とはいったい何なのか。2023年9月14日に史学地理学科の国立歴史民俗博物館で行われた研修では、三年次から所属するゼミについての紹介が行われた。その際、古代史ゼミの担当教員の仁藤智子先生は「王とは何者なのか」という部分に触れた。私は、この部分が当たり前を疑うことに通じていると考える。王という言葉が辞典で引けばその意味はすぐに分かる。しかし、それは王というものの本質を捉えられているとは必ずしも言えない。この点については、まず王はいったいどういった歴史の流れで、何の思惑で、どんな影響があり、だれがなったのかを調査して考える必要がある。研究として答えを出すにはこれでも足りないだろう。歴史上の事柄は背景に様々な要因が複雑に絡み合っているという認識を前提として持っている必要がある。この感覚は、私の中では、大学で様々な分野の専門家の話をじかに聞く体験によって得られたものである。

更に王について考えることは、人がどうやって社会や国家を形成してきたかを考える事であり、それは人を考えることだといえる。これによって、なぜ文学部の学問が人文科学なのかは分かってくる。これまでの高校以前で習っていた歴史の意味を、大学で「なぜ」という視点でより深く理解することができている。話を聞いて理解をしても、その本質は依然として遠くにあり、実は何もわかっていないのではないかと思わされるのが、人の営みであり、それを追求する面白さではないだろうか。

これまでに「そういうものだ」で止まっていたものについて、実は何なのかという疑問を持つことは難しい。そもそも疑問にすら思えないことがほとんどである。しかし、疑問を持つ視点を得て何故だろうと思うことこそが、文学部で学んでいく面白さである。今後、自分の持った疑問をもとに本質をとらえる力をつけていくことは、歴史についての学びや気づきだけでなく、人生の上で必要な力であり良い方向へ進めるための指針ともなるだろう。